いしゃ先生

町おこし映画顛末記 ▶23

あべ 美佳

「戦友」と予告編に感動

いよいよ2015年がスタートした。今年は待ちに待った映画完成の年。このまま「んまぐ」進めば……秋ぐらいには皆さんに映画を見てもらうことができそうだ。いつもハラハラしながら見守ってくださっている皆さん、本当にありがとさまです。まだまだ気を抜けない状況なので、どうぞこのまま最後までわれわれと一緒にハラハラしてけろっす。

西川町大井沢の診療所でへき地医療に尽力した女医・志田周子を「地域の宝」と捉え、県村山総合支庁が主体になり映像化戦略会議を設置したのが08年。私がプロジェクトに交ぜてもらったのが11年。そこからたくさんの仲間が集まり今日に至る。長い、長い、道のりだ。

昨年末、都内某所に集まり、1次ロケの映像のみを編集した(仮の)予告編を上映した。小さなPC（パソコン）の画面に、皆が顔を寄せ、食い入るように見る。約3分の映像を見終わって、皆は声を詰まらせた。涙を隠さない人もいた。その大人たちはプロジェクトの最初から真ん中で頑張ってきた方々だ。大のおじさんたちが心から感動している様子を見て、私も泣けてきた。ここにいる人は年齢も性別も立場もバラバラだけど、皆が「戦友」なのだ。共通点はひとつだけ。「良い映画を作って山形から全国へ発信したい！」その想いのみ。

これまで、資金面も含めわれわれは何度も厳しい状況に立たされた。その都度、なんとか知恵を絞り、誰かに助けられ、励まし合い、ケンカもし、なんとか進んできた。これが正しいやり方です、という教科書があればもっとカンタンだったはず。

でも、われわれはまだ誰もやっていない「新しいこと」をやっている。だからこそ失敗もするし、傷だらけにもなる。逆に、それだから助けてくれる人も現れたのかもしれない。ここまで来られたのは、大げさでもなんでもなく「奇跡」だろう。

この取り組みを通して学んだこと――それは、最後の最後に残る一番強いものは「目に見えないもの」だということだ。言い換えれば「信じる力」だったり「信念」と表されるだろう。人のせいにして始めたことは、うまくいかなくなったとたん、結局人のせいにする。われわれはそこだけは自信があった。皆、自分が希望して始めたことなのだ。

「世のため、人のため、つまりは自分のため」だべっす？

新しい年のスタートにあたり、「戦友」を2人、紹介しよう。プロデューサーの上野境介氏と岡雅史氏だ。上野さんは大阪出身、岡さんは北海道出身。上野さんはまだ30代、なのに何十本も映画に携わってきたたたき上げの方だ。

今回、その人脈と経験に本当に助けられている。自分のじいちゃんぐらい年の離れた御大相手にも臆することなく仕事をする姿には頭が下がる。根っからの映画人であり、ザ・プロフェッショナルだ。難儀なプロジェクトにお誘いしたことをわびると「僕の映画人生を振り返った時、5本の指に入る作品になると思います」と笑ってくれた。

もう一人のプロデューサー岡さんは大河ドラマにも出演する俳優でもある。「伝説のマタギ・風のおんつぁん役を演じるため、自分の夢を重ねて頑張ります」と言ってくれた。映画化が正式に決まった日。われわれ3人は、帰りの新幹線で乾杯をした。うれしくて、舞い上がって、平田牧場の三元豚とんかつ弁当を買いこんだ。祝杯だ！と言いながら、3人とも値下げ品を選ぶところが笑えた。あのとんかつの味は生涯忘れないだろう。ほんてん、んめがった。

来週から始まる極寒の冬ロケも、皆で乗り切っべ。そうだ、エキストラもまた募集してますので、よろしくです。

（脚本家・作家、尾花沢市出身）

＝月1回掲載します